

2. 寄稿：景観はだれのもの ～ 命・向き合う風景（景観）～ （フリーランス 元経済新聞社記者室勤務 卯月 文）

まずは：まえがきのようなもの

4月の初め、Japa 理事から「文化保存（文化財？）や歴史観について1,800字前後で原稿をお願いします」というメッセージを頂いた。ちょうど他誌のコラムを入稿したばかりだったので、単純に「よろしいですよ」と安うけ合いをしてしまいました。日常の雑事を済ませた数日後、じっくり読み直したら、「文化保存」とか「歴史観」とか、何とも壮大なテーマでびっくり。私はこの道の専門家ではありませんので荷が重い。お断りするには残された締切日が少ない。ということで、意を決してご依頼のご要望とはいささか違うかもしれませんが下記拙文でお届けすることにお許しを。

誘われるままに、「古都 歴史都市、奈良・京都・鎌倉の歴史的遺産と景観を守る三都市民共同フォーラム」という、ジグムジグムのような長い名前の設立総会に参加したその時の、西山卯三先生（京大名誉教授）の講演で「今の風景が今を生きる子ども達にとっての原風景である」と言うお言葉に触れ、それまで目の前に広がる風景を単純に美しい、素晴らしい、きれいなどと捉えていたことに、大きな衝撃を受けました。ガツンと頭を叩かれたようなこの時の思いは今でも忘れることができません。

これより少し前、鎌倉では、三大緑地（広町、常盤山、大峯）の一つで、約60haにも及ぶ鎌倉最大の緑地、「広町の森」の開発問題が浮上しました。聞きつけた「山と溪谷」社の社員の案内で、緑地保存の仲間と、紀伊半島の奈良県と三重県にまたがっている大自然の宝庫、「大台ヶ原」に行きました。今のようなドライブウェイなど無い頃です。頂上が台地状に広がる標高1,700mの台地で、屋久島に次ぐ多雨地帯だそうです。森に一步足を踏み入ると、植物の種類が多いのが目につきます。サクサクと踏む落ち葉の下からも、そこを住処としている小さい虫が這い出してきました。大自然の中の小さな命の営み。台風や雷で倒木の多いのもこの森の特徴とか。腐りかけた倒木から新しい芽が出ています。その幹を住処とする植物や小動物がいる。見事なまでに繰り広げられる命の交代劇。多様な命との関わりの中から生まれた大台ヶ原の壮大な景観がそこにはありました。

芹摘んで富士の湧水なつかしく

初日の出江ノ島よりの富士仰ぐ

母の晩年の句です。母は80歳を目の前にして、郷里の富士市で同居していた姉夫婦に相次いで先立たれ、鎌倉に住む私と富士を往復する生活になりました。移動はもっぱらマイカーです。ドア to ドアで約2時間、ドライブには丁度いい所要時間です。秦野中井インターから富士インターまで富士山を前に横に眺めながらのドライブです。その間、後部座席に乗っている母は一人つぶやくように、変わる景色と対話しています。「今日の富士山は爽やかでご機嫌がいいようね」「あら、あそこに彼岸花が、きれいねえ」。長い都夫良野トンネルを抜けると、禿げ山のように赤茶けた一帯が目に入ります。東富士演習場です。「ひどいことをするわねえ、富士山は御神体なのよ、今に怒って火を噴くわよ」。ここを通る時の母の決まり文句です。富士の

家に着くと、ドライブの疲れも見せず早々に、庭の草花の手入れです。「お留守番ご苦労様、留守にしても良く咲いてくれているわね、ごめんね、はい！お水よ」まるで子供と話しているようです。見事までの自然体。人と自然との関わり方の原点を見ているようです。大台ヶ原のような大きな自然も民家の庭の小さな自然も、人と自然との関わりには、変わりはありません。

富士のお山の勇姿は、何処にいても何をしても母にとっては、叡智と勇気と優しさを与えてくれる原風景なのです。「あたまを雲の上に出し・・・富士は日本一の山」を口ずさみながら富士のお山の水に喉を潤し、静かに96年の生涯を閉じました。

私たちの先祖は自然の恵に感謝し、学び、脅威と闘いながら、叡智をもって自然と折り合いをつけ、美しい景観を作り出してきました。

鎌倉はこの日本列島の真ん中に位置し、気候・地味に恵まれた豊かな自然環境と、人々の営みから生まれた美しい景観を擁し恵まれたまちです。先祖から託されたこうした地域資源を、未来に向けてどう創造していったらいいか、景観はわたし達だけのものではありません。



1990年の常盤山



1993年本格工事の始まった常盤山



1994年6月工事中の常盤山

古都の景観を守るために古都法の不備を補う手立てとして立法された「歴史まち法」の制定のきっかけとなった常盤山の開発の状況

補：寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載